

海に向かう家、海を避ける家

居住環境の構え方に関するスクリプト

三上訓顯

本報は、風土的条件を顕著に受ける海岸沿いの住宅・民家を、構え方の視点から3地域を対象に論じたものである。湘南海岸の現代建築では、建築構造や建築材料が進化し、建築自体がシェルターとしての機能をはたしていること。橋立地区と宿根木地区の歴史的集落では、民家自体がシェルターであると同時に、地形自体が風雨をさけるシェルターとして機能している。こうしたシェルターの構え方に基づく、現代建築と歴史的民家群との大きな相違点は、住宅周りの屋外の暮らし方の違いではないか。それは現代住宅が屋外の暮らしをあまり必要としない「閉じこもり型」であるのに対し、歴史的民家群は屋外での作業や蜜な近隣コミュニケーションといった屋外での暮らし方があり、そのことが構え方の違いになっているのではないか。その背後には生業の違いと行ったライフスタイルの変化があったことが伺える。本稿では、それらの相違を踏まえながら、現代住宅における屋外の暮らしを配慮した建築の構え方があることを示唆した。

キーワード：居住環境、風土、湘南海岸、橋立、宿根木、構え方

1. はじめに

私が、居住環境の計画や地区のデザインを行うときに、どこに住まいを建てるかというのかという場所の選択と同時に、どのように構えるのかといった住宅・民家と周辺環境との関係性が関心事となる。というのも、その土地固有の気候や気象、そして地形や地質や景観といった諸要素の包括する風土という概念があるからだ。そうした風土とある種の理解を持ちながら居住環境が計画されるべきだろうと私は考えているからだ。そこで本稿では、風土的条件が顕著な我国の海岸沿いの3地区をとりあげ、居住環境の構え方について、それらの現場を歩きながら、私なりの気づきを記述しておくことにした。

2. 海に向かう家

私が横浜市に住んでいた頃、午後遅くからしばしば湘南海岸へ散策に出かけた。JR 藤沢駅から通称江の電と呼ばれるローカル線に乗り、狭隘な住宅地の隙間を走り抜けると、突然眼前に湘南海岸が広がり、電車は「鎌倉高校前」という瀟洒な駅に着く。ここから湘南海岸沿いを歩きながら、稲

村ヶ崎までゆくのがいつもの私の散策コースであった。図1は、散策のおりに稲村ヶ崎から湘南海岸を撮影したものである。山が海に迫り階段状の斜面には住宅が連なり、西日が美しく、背後には富士山が見える風光明媚な景観を持った場所である。

湘南海岸は、明治以後当時の西欧の流行であった海水浴保養が日本に紹介され、源頼朝開幕の鎌倉を除けば、逗子、葉山、藤沢の町が海水浴に適した保養地として新たに注目



図1. 湘南海岸の家

され、文化人、政治家、富裕層などの別荘が建設されてきたことが今日の各町の形成基盤の1つとなっている。

以後東京近郊の海浜保養地として認知され、また市民の余暇活動の場として多くの人々が訪れるとともに、戦後は、東京への環境が良好な通勤圏としておおくの人々の住宅が建ち並び、保養地としての性格を併せ持ちながらそれぞれの町が形成されてきている。

概してこのあたりは山が海に迫り、比較的急な斜面には、数多くの住宅地が階段状に張り付いている。そうした斜面上の住宅地の風景を眺めながら、あれらの家々のリビングルームのピクチャーウィンドーからは多分湘南海岸が全面に広がる毎日の暮らしがあるんだろうということは、建築の概観から伺える。本稿では、こうした建築デザインを「海に向かう家」と呼んでおこう。

こうした建築形態の典型例は、図2で示した、吉村順三設計による湘南秋谷の家(文1)(文2)であろう。伝統とモダニズムを融合させようとした彼の作風からみれば異質なこの建築は、断面図で見れば防波堤を築き、その直前のテラスを介して海に向かう居室群が海と平行に続くという大胆でコンセプチュアルなデザインである。こうしたデザインを可能にしたのは、堅固なコンクリート構造とスチールサッシや雨戸といった現代の建築構造と建築材料の進化によるものである。

三浦半島の油壺あたりから大磯にかけて続く湘南海岸沿いには、こうした海に向かうコンセプチュアルな家がしばしば散見できる。この地域は比較的気候温暖であり、海に近接するというライフスタイルも、生業ではなくむしろ景観を楽しもうとする保養地的関心もあり、建築デザインもそうした居住者の意図の繁栄なのだろう。そんな意図が海に向かう家の集積となり、この湘南海岸の景観を形成しているのであろう。

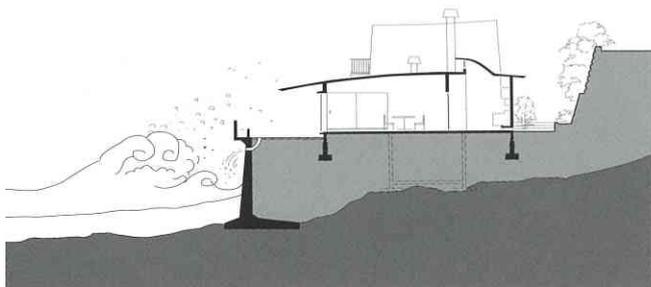


図2. 吉村順三設計・湘南秋谷の家断面図(文1より作図)

3. 海を避ける家

次に湘南海岸とは対照的な風土とされる日本海沿いの集落2例をとりあげる。いずれも国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。これらの建築の構え方についてみてみよう。

3.1 福井県加賀市橋立地区

日本海を望む橋立地区の成立を資料(文3)から読み取る。江戸中期までは小さな半農半漁の集落であり、江戸中期以降、近江商人に引き立てられて商船の船乗りになるものが生まれ、やがて彼らは自立し北前船の船主になっていった。

当時の北前船とは、商品を預かって運送する輸送業ではなく、各地の港で船主自体が商品を買いつけ、それをまた他の港で売買することで利益を上げる廻船であり、現代でいうところの物流商社である。北海道や北陸以北の日本海沿岸諸港から下関・瀬戸内海を經由して当時の大坂に向かう西回り航路、北海道や東北から江戸に向かう東回り航路とがあった。

明治初頭には、この西回り航路北前船の最盛期となり、一艘の北前船で現在の価格にして1億円以上稼いでいた(注)と説明を受けた。従って橋立の集落にも、主屋、納屋、客殿、付属屋といった豪壮ながら閑静な佇まいの邸宅を構えるものが増えていった。この時期が橋立地区繁栄の最盛期だったのである。この頃の姿が現在の橋立地区集落成立の基盤となっている。

明治末期に海運業や鉄道の近代化が進み、そうした近代化の波に、橋立の北前船船主達は取り残され、やがて船主達は没落してゆく。豪壮な家屋敷、客殿などは、買い取られ、また材木目当てに解体もされた。それでも、現在橋立地区には、往事の繁栄を伝える伝統的家屋が32棟、その他の付属屋が75棟残されており、当時の繁栄をしのぶことができる。現在の重要伝統的建造物群保存地区の対象も、この江戸後期から昭和初期迄に建てられた民家を保存対象としている。

図3(文3)(文4)は橋立地区の配置図である。紙面の関係で割愛したが、集落東側には港がある。海岸沿いには崖が続き、少し高台となったところに橋立の集落がある。最大の特徴は、海岸と集落との間に存在する小高い山あるいは丘である。いくつかの植林が施された小高い山あるいは

丘の背後に隠れるように、集落が続いている。それは海を避けた集落の構え方なのである。

こうした構え方をする理由は、北西からの偏西風を防ぐということが考えられる。もう少し局地的な言い方をすれば、冬のシベリア寒気団をもたらす北あるいは北西からの大変厳しい季節風を避けるための集落配置であることが伺える。冬の気候が厳しい、この地方の建築の構え方といってよく、その意味で北西方向の山や丘は、この集落にとってグランド・シェルターなのである。

さらに図4は橋立地区の民家形態である。本来半農半漁であった橋立地区の民家は、土壁による木造真壁造である。今でも民家妻壁の上部にそれをみる事ができる。さらにその真壁の上を板塀で囲いダブルスキン構造とし、また民家の基礎は石垣とするなど堅固なしつらえとしてながら、海からの強い風雨や雪や潮風を防いできたことが伺える。それは厳しい気候をさけるための先人達の風土的了解の結果が、この集落全体の景観を形成している。こうした風雨

などに対する民家の囲いをダブルスキン・シェルターと呼んでおくことにする。

3.2 新潟県佐渡市宿根木地区

宿根木地区の歴史は古く、同地区の広報誌及び現地の説明板からは、弘安8年(1285年)にここの地名が登場し、嘉元2年(1304年)には、宿根木白山神社が創建された。以後漁業あるいは船宿としてこの町の基盤が形成されてきたことがわかる。

江戸時代後期から明治にかけて、橋立地区同様に北前船に



図4. 橋立地区の民家

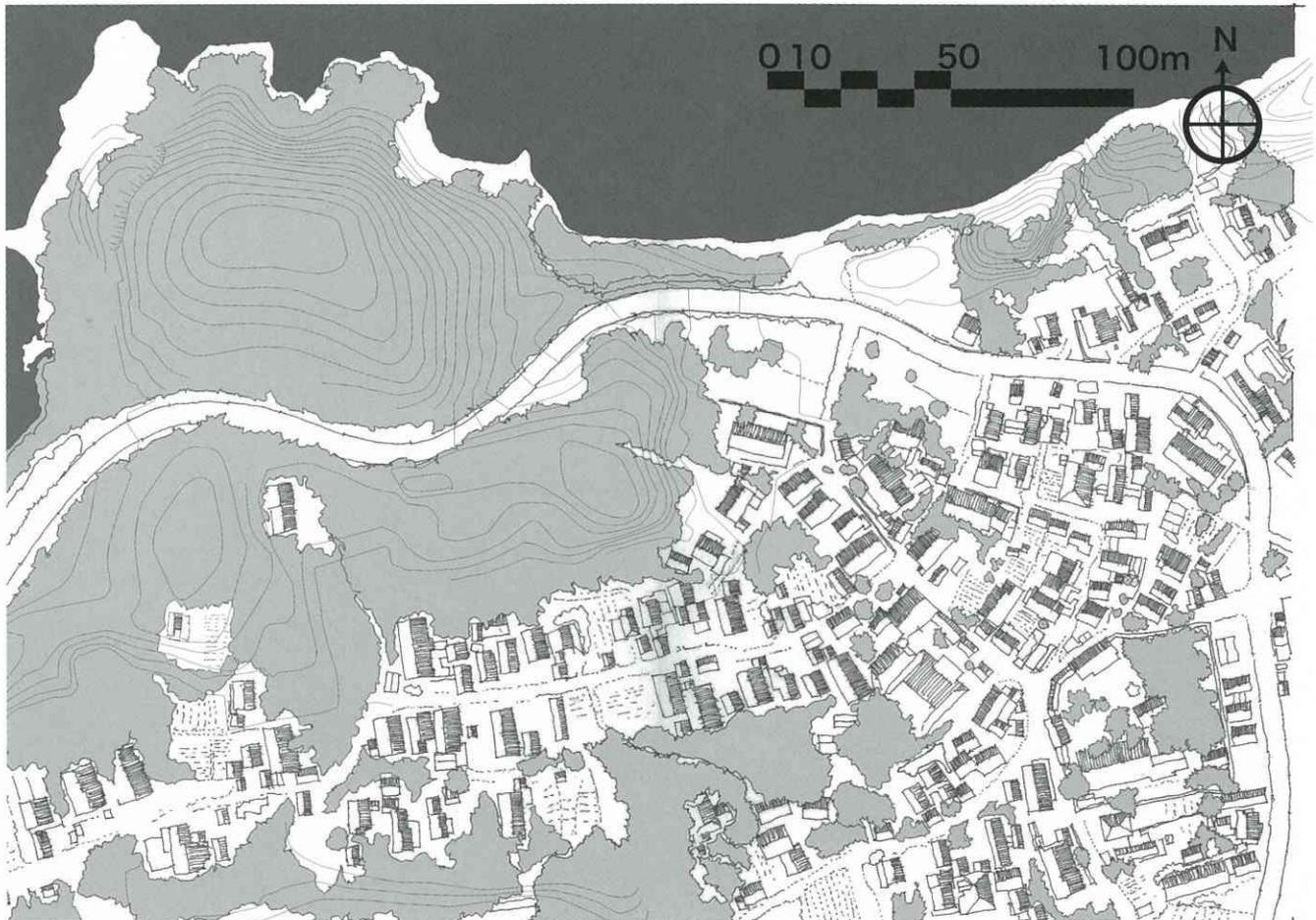


図3. 橋立地区集落配置図

よる西回り航路の廻船業が興隆を極め、北海道松前から鮭、かずの子、身欠、目切、笹目、白子、昆布を買い込み、酒田、秋田、三国、敦賀、新潟、下関にそれらを売ったと記されている。宿根木には、船主や船乗りの他、船大工、鍛冶屋、桶屋などの海に関連する人々が数多く居住し、海運業を柱とする高密度な集落であったことが伺える。この江戸時代後期からの町並みが現在の宿根木の景観となっている。

明治時代後期にはいと国の近代化のため、廻船業は衰退し、集落背後の小木台地の開墾と農業、そして漁業という半農半漁の町として現在に継続している。重要伝統的建造物群保存地区に指定されたのは、1991年である。

図5(文5)(文6)は、宿根木地区の配置図である。南に港を配し南北軸上に集落が配置され、集落の背後は小木台地であり農地が続く。各民家が全て路地という狭隘な空間によってつながれおり、それ自体がかってから高密度居住であったこの集落の特徴的な景観をみせている。ここでは、集落の発展、そして人口の増加とともに居住地を拡大するのではなく、むしろ1つの所に集まって住み続け、その結果として路地を骨格とし、1haの土地に百数十棟の民家が建ち並ぶ高密度居住を選択したのである。およそ街道を中心として広がってきた我が国のリニアな形態の集落が多いなかで、狭隘な路地だけで構成された高密度な宿根木は、大変異質な空間構成だといえる。

さらに特徴的なのがこの集落の立地である。図6の中心部分が宿根木集落だが、この背後に続く小木台地から20mほど下がった窪地状の狭隘な土地に、身をひそめるように集落が密集立地している。小木民族博物館の記述では、冬から初春にかけて「タカカゼ」と地元では呼んでいる北西からの風が吹き、冬は出漁できなくなる。建築的に見れば、小木台地の陰にひそみ、多くの民家が密集し高密度に固まっている立地は、冬の気候が厳しい日本海からの北西風をよけるためであったと理解できる。実際に集落内を歩いていると、海の気配を感じる事が無く、風もなく比較的のびやかな屋外環境であることを体験した。

図7は、宿根木地区の民家の一例である。土壁による木造真壁造であり、その外壁を板壁ですべて覆っているダブルスキン構造である。特に各民家には、土壁漆喰塗りの小屋が付属しているが、これも外壁は板壁で覆われているの

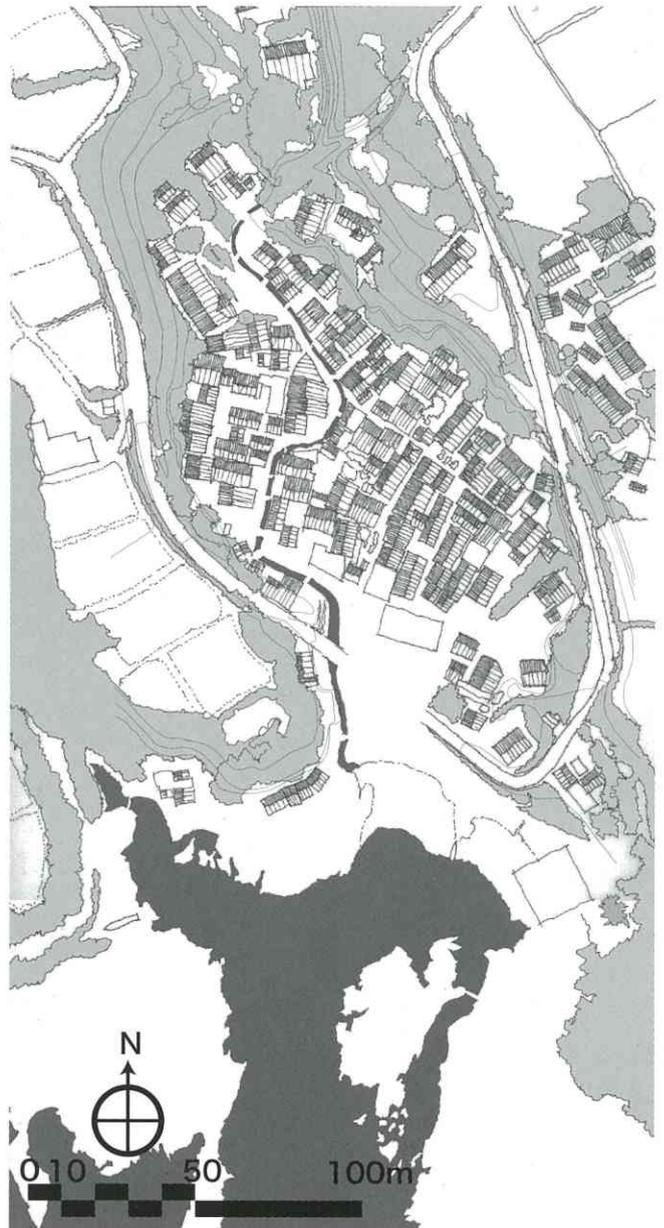


図5. 宿根木地区集落配置図(等高線は5m間隔)



図6. 宿根木地区の集落

が特徴である。そうやってこの土地の厳しい気候環境から宿根木の民家が守られてきたのである。

もう1つ特徴をあげれば、現在では少なくなったが当時は石置木羽葺屋根が主であった。それは木羽の上に石を重しとしたのが特徴だが、木羽の杉の材料は、耐久性がないのでこまめに張り替える必要が生じ、これは主に女性の仕事であった。やがて、それよりは耐久性の高い瓦が普及しだしてから、現在の瓦屋根となっていった。

3.3 橋立と宿根木の共通点

橋立と宿根木の集落に共通する2点がある。第1に、北西からの厳しい風雪に対して、山や丘、植栽、あるいは窪地といった自然の地形を利用したグランドシェルターを用いて居住環境を形成してきたことである。第2は、土壁による木造真壁造の建築の外壁の外側を、さらに板壁で覆うダブルスキン・シェルターとしたことである。こうした二つのシェルターが囲われた集落を歩いていると、潮風を受けることなくすこぶる快適な屋外環境である。それは「海を避ける家」の快適さだともいえよう。

4. シェルターとしての居住環境

シェルターが風雨から暮らしを守るためのしつらえととらえれば、建築や地形もある種のシェルターである。図8は、本稿で取り上げた各3地区の構え方の概念図である。

湘南は、建築自体がコンクリート造という耐久性のあるスキンで覆われた戸建て住宅である。これをダブルスキン・シェルターと呼んでおく。それは屋内がすこぶる快適だが、一歩外へ出れば戸外は風雨の影響をまともに受けることに

なる。湘南海岸全体に目を広げても、こうしたダブルスキン・シェルターの建築群の集積である。おしなべていえば現代住宅は、風雨のすべてに対して戸建て建築で対応できるダブルスキン・シェルター型といってよい。それは前述したように建築構造と建築材料の進化に由来する。

さらにもう1つ付け加えれば、戸建ての敷地単位で風土とは無関係な土地を購入し建設するといった具合に、敷地の購入形態がある。建築自体が強固なので、あまり風土的影響を考える必要がなくなった分、通勤や眺めの良さを堪能しながら暮らしたいとするなどのライフスタイル実現に、建築の軸足が変わってきたとも言えよう。

こうした現代住宅に対して、昔からの住宅である橋立地区や宿根木地区の民家では、建築構造自体は従来方法によるが、それをダブルスキン・シェルターとすることで風雨から暮らしを守ってきた。さらにそれらの民家群は、風雨が吹き込む北西方向の山や丘や植栽、そして風雨を避ける窪地という立地によっても風雨をしのげるグランド・シェルターという二重のシェルターに囲まれている。それは風土的了解の結果として、各集落の民家群-集落が成立し維持されてきたわけである。

どちらも風雨をしのぐという建築の性能的視点では、あまり変わらないだろう。とすれば、何が変わったのかということである。

それは戸外での暮らしぶりだといえる。戸外で作業をしたり、近所の人達とコミュニケーションをしたりといった具合に、戸外での暮らしを含んで生活とするのか、いやそうではなく、付き合いは仕事や趣味仲間やネット上なので、



図7. 宿根木地区の民家

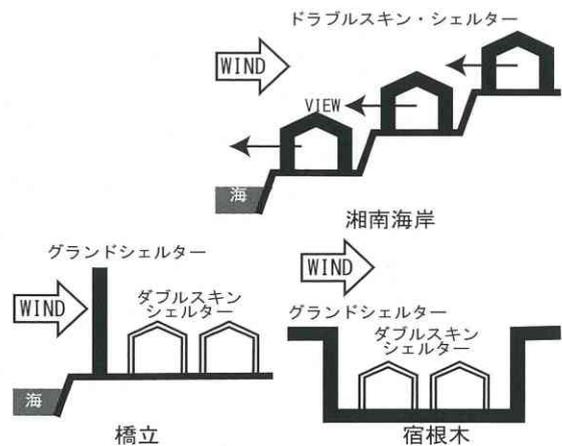


図8. 各3地区の構え方の概念図

近隣付き合いは少ないから閉じこもりで十分だとする暮らしを選ぶのかの違いだといえる。それらの背後には、生業が戸外での作業を余儀なくされる半農半漁から、給料生活や自由業といったように戸外の暮らしを必要としない暮らしへの変化であり、要はライフスタイルの変化といえる。

現代住宅は、土地や建築の購入形態からして、風土や近隣とのコミュニケーションや催事などの地縁的事情をあまり考慮する必要がなく、他方で通勤・通学や個人の趣向や憧れなどで住む場所が決められてきたと捉えられる。それは家の中に閉じこもるのに最適な暮らしぶりだともいえよう。そのために現代住宅建築は、閉じこもるのに最適化したしつらえを提供してくれるわけである。そういう現代住宅の空間的性格を「閉じこもり型」と呼んでおくことにする。

5. まとめ

本稿では、ダブルスキン・シェルターに覆われた地縁の関係性を欠いた閉じこもり型の現代住宅と、二つのシェルターで覆われた地縁の関係が高い歴史集落をみた。今後居住環境を計画する際には、グランドシェルターの活用が望まれるという知見を得た。だが他方で、はたして現代住宅が閉じこもり型でよいのかとする個人的な疑問もある。

というのも、私は閉じこもり型の暮らしぶりが、それほど快適とも思われない。そう考えていた頃、それまでの公団住宅暮らしから、京都の都心部にある町家に引っ越した。図9は、現在の私の住处である。昔風に言えば長屋、今風に言えばテラスハウスであり、今ではつくることのできない土壁で隣家と仕切られており、防音性能は高く、都心立地だから、生活は至極便利である。

そして、京都市は町内会が組織され機能している。町内30世帯の顔と名前は覚えやすいし、おもてで出会えば季節の挨拶をする。なによりも自宅前の路地では、子供達の安全な遊び場となり、夏に地蔵盆があり、町内の人達が寄り集まって子供を遊ばせながらの宴会が半日続き、冬の始まりには、お火焚祭で神主さんと呼んで町内でお稲荷さんの前でお祓いをおこない、元旦の朝には、新年の挨拶のために町内の人間が総出で集まり、お神酒が振る舞われる。もちろんそんな催事のために当番があり、催事の仕事を順番で回ってくる。何かことが起これば町内の人が相互扶助の



図9. 京都市内の自宅（京都市旧市街地美観地区）

精神で動いてもくれる。そんな暮らしを経験してゆくと、近隣とおおいにコミュニケーションがある現代のライフスタイルも結構楽しいものである。

近年、地域防災の視点から、地震や津波の災害時に高齢者が避難するためには、近隣に住んでいる人々の協力が不可欠になってきている。そう考えれば、これまでの閉じこもり型の暮らしから、近隣とつきあう地縁的暮らし方も必要なのではないかと考えさせられる昨今である。そうなれば、居住環境の構え方も、これから変化してゆくのだろうと思われる。

参考文献

- 文1) 吉村順三：吉村順三作品集 1941-1978, 新建築社, 1978, P54-57.
 - 文2) 吉村順三：吉村順三設計図集, 新建築社, 1979, p52-53.
 - 文3) 国土地理院空中写真金沢地区, 1975年撮影.
 - 文4) 加賀市：加賀橋立地区伝統的建造物群保存地区保存計画, 2005.
 - 文5) 国土地理院空中写真佐渡地区, 1975年撮影.
 - 文6) 新潟県佐渡郡小木町・TEM研究所編著：宿根木の町並みと民家・2, 1994年.
- 本稿掲載写真は筆者撮影, 2012年撮影.

注釈

注) 橋立地区公開民家蔵六圓の説明による.